

# はまなかのぶひさ絵画展

— 理智と童心と —

the way you were

令和2年4.18(土) → 5.31(日)



《天窓》1980年 油彩・板



《月のペンダント》1979年 油彩・板

濱中信久（1942－1980）は、昭和17年、滋賀県愛知郡秦川村（現愛荘町）に生まれ、父が住職を務める天台の名刹、金剛輪寺で育ちました。高校時代より独学で油絵を学び、自然の事物を抽象化する独自の作風を築き上げました。昭和42年（1967）、25歳の時、「画壇の仙人」と称された熊谷守一（1880－1977）から「世の中に顔出しすると好い」と、翌々年に東京銀座で初個展を開きます。以来10年間、東京や京都などで個展活動をし、作品は400点を数えました。

昭和46年（1971）、難病の嚢胞腎を発病、病状は徐々に悪化し、昭和52年（1977）には右半身不随になり、ほぼ1年を病院で過ごすことになりました。以後、4年間寝たきりの生活のなか、1日1時間の限られた制作時間で絵を描き続けていきます。

展覧会では、濱中の初期のエチュードのほか、自然や生物、仏などの姿を描いた作品の数々を紹介します。

背景画／《残月》1973年 油彩・板



《丘の上から》1975年 油彩・板



《おだまきそう》1975年 油彩・板



《湯宮村への道》1976年 油彩・板